

長崎の教会群とキリスト教関連遺産 — 長崎から世界遺産を！ —

第10回目



頭ヶ島天主堂内観 ©日暮雄一

長崎県世界遺産登録推進室



■はじめに

世界遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、キリスト教の伝播と繁栄、厳しい弾圧の中での250年に及ぶ密かな継承、そして奇跡の復活という世界に類を見ない独自の「キリスト教の伝播と浸透のプロセス」を示しています。

1865年の大浦天主堂での「信徒発見」をきっかけに、明治政府による弾圧を経てキリスト教が解禁されると、これまで潜伏キリシタンとして信仰を継承してきた集落に西洋と日本の建築技術が融合した教会堂が次々と建設されました。今号では、長崎地方を舞台にどのように教会群が形成されていったかをご紹介します。

■各地での教会堂建設

「信徒発見」以降、長崎地方の各地から、潜伏キリシタンの宗教的指導者が大浦天主堂を訪れました。彼らは、神父の指導を受けてそれぞれの集落へと教理を伝え、潜伏キリシタンの多くはカトリックへ復帰していきました。やがて、教会堂の建設を熱望する機運が高まり、それぞれの集落に、日本の伝統や習慣を取り入れ、また地元の材料を用いた素朴な造形をもつ教会堂が建設されました。

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を構成する教会堂は10あり、大きく4つのグループに

分類されます。1つ目は大浦天主堂で、開国後に居留地の外国人のために建てられたものです。「信徒発見」以降は、日本の再布教・再宣教の拠点として大きな役割を果たしました。2つ目は、出津教会堂、崎津天主堂で、16世紀から禁教時代を経てキリスト教信仰が継承された集落に建てられたものです。3つ目は、旧五輪教会堂、旧野首教会堂、黒島天主堂、頭ヶ島天主堂で、18世紀末に外海から移住した潜伏キリシタンが形成した集落に建設された教会堂です。2つ目・3つ目の教会堂は、16世紀に伝来したキリスト教が禁教時代も継承されたエリアが長崎地方であったことを表しています。4つ目は、大野教会堂、田平天主堂、江上天主堂で、キリスト教解禁後に新たにカトリックの集落として発展したところに建設されたもので、解禁後のキリスト教信仰の広がりを表しています。

■「潜伏キリシタン」と「かくれキリシタン」

16世紀のキリスト教の宣教によって誕生した日本のキリスト教徒のことを、ポルトガル語を語源とする「キリシタン」という言葉であらわします。禁教時代になってもキリスト教を信仰した人々は、表面的には仏教徒を装い、内面においてキリスト教を信仰することを余儀なくされました。このため、禁教時代のキリシタンのことを「潜伏キリシタン」といいます。一方、19世紀のキリスト教解禁後もカトリックへ復帰せず、禁教時代の信仰形態を継承した人々もいました。これらの人々は「かくれキリシタン」と呼ばれ、現在も生月島などで潜伏時代から続く信仰を継承しています。

■潜伏キリシタン集落における教会堂

禁教時代に外海から離島部（下五島、上五島、野崎島、黒島）に移住したキリシタンたちは、在住の先住者たちとの関係の中、斜面地や僻地等の不便な地に居住を強いられました。現在、これらの集落には禁教時代からの信仰の継続を象徴する教会堂が建ち、他地域には見られない長崎地方独特の景観を形成しています。



旧五輪教会堂（五島市、国重要文化財）

18世紀末に大村藩から久賀島へ入植があり、その中に外海出身のキリシタンが含まれていたことから、潜伏集落が形成されました。解禁後には、それらの潜伏集落に教会堂が建てられます。その中で最初に建てられたのが1881年の浜脇教会で、後に五輪地区へ移築され、現在の旧五輪教会堂となっています。木造教会では日本最古といわれています。



旧野首教会堂（小値賀町、国重要文化的景観の重要構成要素）

18世紀から19世紀にかけて五島を経由して外海からキリシタンの入植があり、潜伏集落が形成されました。解禁後は島内の潜伏キリシタンはすべてカトリックへ復帰し、当初は木造教会が建てられました。1908年に鉄川与助の設計・施工により、煉瓦造の旧野首教会堂が建設されました。



黒島天主堂（佐世保市、国重要文化財）

黒島へは18世紀に入植が行われ、移住者の中に外海などのキリシタンが含まれていたことから潜伏集落が形成されました。解禁後は潜伏キリシタン全員がカトリックへ復帰し、1902年にマルマン神父の設計により煉瓦造の黒島天主堂が建てられました。

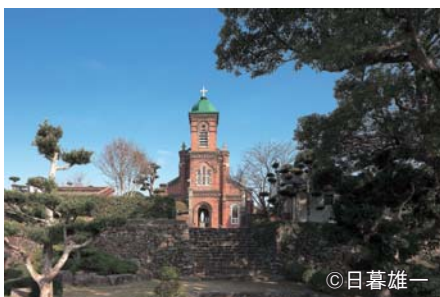


頭ヶ島天主堂（新上五島町、国重要文化財）

頭ヶ島へは、18世紀末に大村藩から入植が行われ、その中に外海などのキリシタンが含まれていたことから潜伏集落が形成されました。約十年の歳月をかけて1919年に建設された日本では数少ない石造の教会堂です。鉄川与助が設計・施工しています。

■解禁後のキリシタン移住と教会堂

19世紀後半に信仰の自由が許された後、日本におけるキリスト教信仰は新たな展開を見せます。各地にカトリック信者の新たなコミュニティが形成され、教会堂が建設されました。



田平天主堂（平戸市、国重要文化財）

1879年に外海に赴任したド・ロ神父が、貧困に苦しむ信者の一部を田平に移住開拓させました。その結果、田平にキリシタンの集落が形成され、鉄川与助の設計・施工により1918年に建設されました。鉄川与助の煉瓦造教会堂は、旧野首教会堂に始まり、田平天主堂に終わります。煉瓦造教会堂の傑作といわれています。



©日暮雄一

江上天主堂（五島市、国重要文化財）

五島列島奈留島に所在する教会堂で、1918年に建設された木造教会です。江上地区には江戸末期に西彼方面から移住があり、解禁後に洗礼を受け、カトリックの集落として発展しました。設計・施工は鉄川与助です。木造教会堂の中でも完成度の高い作品であり、鉄川与助の代表作の一つです。

■「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産としての価値

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、日本におけるキリスト教の伝播と浸透のプロセスの中で生まれました。

日本には、16世紀の大航海時代に西洋文化が伝来し、キリスト教が伝わり繁栄します。その後、伴天連追放令を契機としてキリスト教は弾圧され、信仰は禁止されます。そのような状況下でも、九州西海岸、特に長崎地方には、19世紀中期の日本開国に至るまで密かに信仰を継承した人々が存在しました。彼らは、日本の生活環境、自然環境や民俗的慣習に順応し、独自の宗教的・文化的伝統を形成しました。19世紀の開国後に再来日した宣教師と再会すると、やがて教会堂を建設していきます。それらの教会堂は、その場所に禁教時代においても信仰を継承し続けた集落が存在したことを象徴しています。

一方、禁教が解かれた後も弾圧下における信仰の形式を継続した人々（いわゆる「かくれキリシタン」）もあり、現在でも禁教時代の様相を今なおとどめる貴重な集落が存在しています。

このように、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、450年以上におよぶキリスト教が日本に根付いていく過程～伝来・繁栄・弾圧・潜伏・そして奇跡の復活という一連のプロセスを示す、世界でも他に類例がない貴重な遺産です。

■世界遺産登録へ向けて

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が目標としている平成27年の世界遺産登録を実現するためには、この夏に行われるユネスコへの推薦決定が必要です。文化庁からは、国内候補の中では最有力との評価を得ています。「富士山」に続いて、「長崎の教会群」も世界遺産になれるよう、皆様の力強い応援をよろしくお願いします。

次号からは、「長崎の教会群」の構成資産の見所や魅力をわかりやすくご紹介する新シリーズが始まります。どうぞご期待ください。